

で両所見の一致が82%であった。反対にシンチで陰性とされながらCAGで狭窄所見のあった偽陰性が17例(15%)で、うち狭心症が16例で12例は50%以下の狭窄。残り4例は75%以上の狭窄であった。50%以下程度の狭窄や、75%以上の狭窄でも良好な側副路があれば心筋の脂肪酸代謝に影響しないと考えた。偽陽性は3例あり、すべて拡張型心筋症であった。安静時BMIPP心筋シンチの早期像は虚血性心疾患の診断に有用であった。

10. ^{201}Tl 心筋シンチグラフィにおける ^{201}Tl 分布状態の定量化：拡張型心筋症での検討

加藤千恵次 伊藤 和夫 古館 正從
(北大・核)
小野 智英 (同・循内)

拡張型心筋症(DCM)例での ^{201}Tl 心筋シンチ SPECT 像の ^{201}Tl 分布状態の不均一性を一次モーメントで客観的に数値化する方法を試みた。一次モーメントは画像の2次元的な濃度変動を敏感に抽出する定量的尺度である。対象は DCM 例 20 例、対照例 19 例。各症例の ^{201}Tl 心筋 SPECT 長軸矢状断層像 12 枚から一次モーメントの総和を算出した。一次モーメントは ^{201}Tl 分布不均一程度の視覚的評価との有意な関係を認めた。また一次モーメントは DCM 群では正常群より有意に高値であり、心不全例では非心不全例より有意に高値を示し、左室駆出率との有意な負の相関を認めた。一次モーメントは、 ^{201}Tl 分布状態の視覚的評価を適切に数値化し、DCM の臨床像を適切に表現する指標になりうると考えられた。

11. 川崎病の経過に伴う心筋スキャン所見の推移

西澤 一治 (弘前市立病院・放)
斉藤 俊光 (同・小児)
米坂 勲 (弘前大・小児)

冠動脈病変を有する川崎病 16 例に経過を追って dipyridamole 負荷心筋スキャンを施行し、CAG 所見の推移と比較検討した。スキャン所見は、16 例中改善 10 例、不変 5 例、悪化 1 例であった。初回のスキャンで異常を認めた 12 例のうち 10 例は所見の改善を認め、他の 1 例は不変、1 例は悪化した。初回ス

キャンが正常であった 4 例は再検でも異常を認めなかった。CAG 所見との対比では、CAG で改善を見た 7 例中 5 例はスキャンも改善、CAG 所見に変化の見られなかった 7 例でも 5 例はスキャンで改善を見た。スキャン所見が悪化した 1 例は CAG 所見でも悪化した症例であり、心筋スキャン所見の推移が改善または不変の場合、冠動脈病変の悪化はないと評価できるようであった。

12. $^{201}\text{TlCl}$ 甲状腺シンチグラフィ delayed 像撮像意義の再評価

遠山 節子 秀毛 範至 高塩 哲也
斉藤 泰博 吉田 弘 山田 有則
吉川 太平 山口 香織 竹井 秀敏
油野 民雄 (旭川医大・放)
佐藤 順一 石川 幸雄 (同・放部)

甲状腺結節に対する $^{201}\text{TlCl}$ delayed 像撮像が良悪性の鑑別に有意かどうか再評価を行った。対象 30 例(悪性 17 例、良性 13 例)で $^{201}\text{TlCl}$ 静注後 early image と delayed image を撮像し、各結節の early ratio, delayed ratio, washout rate, retention index, 大きさを求め有意差を検討した。いずれの指標も良悪性間の平均値で差を認めたものの有意差は認めなかった。以上より甲状腺結節に対する $^{201}\text{TlCl}$ delayed 像撮像が良悪性の鑑別に必ずしも有用であるとはいえないのでないか、との結果を得た。

13. $^{201}\text{Tl}/^{99\text{m}}\text{Tc}$ サブトラクション副甲状腺シンチグラフィ——9 年間の経験——

塚本江利子 古館 正從 (北大・核)
F.R. Ferguson, J.D. Laird, C.F. Russell
(ペルファスト市ロイヤルビクトリア病院)

1985 年 1 月から 1993 年 12 月までロイヤルビクトリア病院にて術前にシンチグラフィを施行した原発性副甲状腺機能亢進症 160 例につき検討した。単発性腺腫 145 例の sensitivity は、全体で 55.2% であったが、重量が増すにつれて良好となった。また、単発性腺腫を示す single hot spot を示したものの 94 例では、72 例が正しく診断され、これをもとに、頸部一側のみ手術(unilateral exploration)が施行された。多発性病変 4 例においては、シンチグラフィは、一病変

のみ陽性またはすべて陰性でその診断に有用ではなかった。8 例は手術で腫瘍が発見されなかった。全体の手術による治癒率は 95.6% であった。

14. Crow-Fukase 症候群の 5 例

丸岡 伸 山崎 哲郎 間島 一浩
坂本 澄彦 (東北大・放)

Crow-Fukase 症候群は多彩な症状を呈するが、なかでも polyneuropathy, organomegaly, endocrinopathy, M protein, skin change が高率であることから POEMS 症候群とも呼ばれている。稀な疾患であるが欧米に比しわが国に多く、多発性骨髄腫に比して若年に発症し男性に多い。当科で経験した 5 例の内訳は男性 4 例女性 1 例、年齢 33-60 歳、平均 43 歳で、主な症状としては末梢神経障害・下腿浮腫・色素沈着・多毛が 5 例全例に、肝脾腫が 4 例に、M 蛋白・骨髄腫・胸腹水・髄液蛋白増加・うっ血乳頭・耐糖能障害・疣状血管腫・微熱がそれぞれ 3 例に認められた。骨髄腫を合併した 3 例のうち硬化型が 1 例混合型が 2 例で、いずれも骨シンチで陽性像として検出された。本疾患においては硬化型の骨髄腫を伴うことが多く、骨病変の検索に骨シンチが有用である。

15. 腰椎分離症における $^{99m}\text{Tc-MDP}$ SPECT の意義

渡辺 磨 橋本 学 小林 満
佐藤 公彦 戸村 則昭 渡会 二郎
(秋田大・放)

腰椎分離症について、 $^{99m}\text{Tc-MDP}$ SPECT 像と単純 X 線像、CT 像との比較を行い、その意義を検討した。臨床的に分離症と診断された 18 病巣のうち、SPECT で uptake(+) は 13 病巣で、uptake(-) は 5 病巣であった。SPECT で uptake(+) の 13 病巣のうち、11 病巣はいずれも CT で分離間隙の狭い、比較的早期の病巣であった。2 例は SPECT で uptake(+) にもかかわらず CT で分離間隙が不明瞭であったが、そのうちの 1 例は 1 年後に両側分離へと進行しており、SPECT 撮像の時期はきわめて早期の段階であったと考えられた。SPECT で uptake(-) の 5 病巣は、CT でいずれも分離間隙が広く、陳旧性の病巣と考えられた。 $^{99m}\text{Tc-MDP}$ SPECT は腰椎分離症の検出に優れ、早期の治療に貢献し得る可能性が考えられた。

16. 肝切除前後における $^{99m}\text{Tc-GSA}$ シンチグラフィでの肝予備能評価

望月 孝史 加藤千恵次 志賀 哲
鐘ヶ江香久子 永尾 一彦 中駄 邦博
塚本江利子 伊藤 和夫 古舘 正從
(北大・核)

肝切除術前後に $^{99m}\text{Tc-GSA}$ シンチグラフィを施行した 18 例をびまん性肝疾患の有無で 2 群に分け、肝予備能を反映するパラメータの検討を HH15, LHL15, 肝予備能インデックス (HPFI), 肝集積初速度 (D0) で行った。びまん性肝疾患合併群では術前後の HH15, HPFI, D0 に有意差を認めたが、びまん性肝疾患非合併群では有意差を認めなかった。LHL15 は、びまん性肝疾患の有無にかかわらず有意差は認めなかった。びまん性肝疾患合併例の肝切除術後では、肝予備能を反映するパラメータは HH15 である可能性が示唆された。

17. サルコイドーシスにおける ^{67}Ga scan の検討

志賀 哲 望月 孝史 加藤千恵次
鐘ヶ江香久子 永尾 一彦 中駄 邦博
塚本江利子 伊藤 和夫 古舘 正從
(北大・核)

panda sign と λ sign は sarcoidosis 患者の Ga スキャンにおいて特徴的なサインと言われるが、panda sign の出現頻度は人種により違うとの報告もあり、また、胸部以外の病変への Ga 分布の頻度に関する報告は、少ない。われわれは panda sign および λ sign の出現頻度および胸部以外の病変への Ga 分布を調べた。対象は、sarcoidosis 群 29 名、31 スキャン、対照群 94 名、101 スキャン。サルコイドーシスにおける λ サインの sensitivity, specificity は、それぞれ 52%, 100%。panda sign を認めた症例はなかった。眼病変、皮膚サルコイドおよび心サルコイドにおける病変への Ga 集積の陽性率は 6%, 18%, 0% と低かった。